

論文内容要旨

※ 整理番号		(ふりがな) 氏名(自署)	印
論文題目	新生児の肛門周囲部への保湿剤塗布が1か月健診時の紅斑発生および皮膚バリア機能に及ぼす効果：非ランダム化比較試験 (Effects of moisturizing care in the perianal area of neonates on the occurrence of erythema and skin barrier function at the one month checkup: A non-randomized, controlled trial)		
<p>論文内容要旨</p> <p>【研究目的】 肛門周囲部への保湿剤塗布の有無による生後1か月健診の肛門周囲部の紅斑発生、および角層機能(バリア機能、水分保持機能、皮膚表面pH)に対する効果を明らかにすることである。</p> <p>【研究方法】</p> <p>1. 研究デザイン 準実験研究デザインを用いた介入研究</p> <p>2. 研究対象者 正期産で出生した新生児110名と初産婦の母親110名（介入群55名、比較群55名）</p> <p>3. 介入方法 生後1日から1か月健診までの間、介入群と比較群は以下のケアを行った。 <u>介入群</u>：おむつ交換およびシャワー浴後は毎回、肛門周囲部に保湿剤塗布の実施と指導するケア <u>比較群</u>：おむつ交換およびシャワー浴後は、肛門周囲部への保湿剤塗布の実施と指導をしない これまで通りの通常ケア</p> <p><介入内容></p> <p>①保湿剤はママ&キッズベビーミルクローション（株式会社ナチュラルサイエンス製）を使用。 ②塗布範囲は肛門を中心に直径8cmの円内。 ③1回の塗布量は0.1gとしおむつ交換毎に塗布する。 ④介入の説明は生後1日のおむつ交換指導時に行う。 ⑤シャワー浴時に使用する全身洗剤と全身保湿剤、紙おむつ、おしりふきは2群とも同じ製品を使用する。 ⑥介入のフォローアップとして、入院中は主な塗布者である母親の塗布状況を毎日確認し、2週間健診時は観察日誌と口頭で塗布状況を確認した。</p> <p>4. 評価指標と評価の時期 主要評価指標：1か月健診時の肛門周囲部の紅斑の有無 副次的評価指標：生後5日と1か月健診時の①丘疹、びらんの有無、②肛門周囲部の常在細菌数 ③肛門周囲部のTEWL（経表皮水分蒸散量）、SCH（角層水分含有量）、皮膚表面pH（生後1日、生後5日、1か月健診）</p> <p>5. 測定方法 ①紅斑を含む皮疹の有無：観察法、デジカメによる写真撮影（2名の皮膚科専門医が写真で判定）</p>			

備考

- ※印の欄には記入しないこと。
- 論文題目が外国語の場合は、カッコを付し和訳を付記すること。
- 論文題目が日本語の場合は、カッコを付し英訳を付記すること。
- 論文内容要旨は、（研究の目的）、（方法）、（結果）、（考察）、（結論）の順に日本語により2,000字程度にまとめ、タイプ等で印字すること。（文字数を記載してください。）

論文内容要旨 (続紙)

(ふりがな)
氏名(自署)

印

- ②角層機能 TEWL : VapoMeter、SCH : Corneometer、皮膚表面pH : Skin-pH-Meter
- ③常在細菌数 (黄色ブドウ球菌、表皮ブドウ球菌、大腸菌、大腸菌群) : フードスタンプ「ニッスイ」
- ④アンケート調査 (聞き取りまたは自記式) : 児のスキンケアに対する母親の意識、おむつ交換状況等
- ⑤観察日誌への記録 (退院後から1か月健診までの栄養、排泄、入浴、部屋の温湿度、保湿剤塗布回数)

6. 分析方法

統計解析にはSPSS Statistics Ver.26を用い、有意水準は5%とした。2群と紅斑の有無との関連は χ^2 検定、2群の群間比較および群内比較はMann-WhitneyのU検定、2標本t検定、3時点の角層機能の推移は反復測定分散分析を行い分析した。

7. 倫理的配慮

本研究は山梨大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した。対象者に研究の目的・方法・倫理的配慮について口頭と文書で説明し、本人あるいは代諾者の自由意思による同意を文書で得た。

【結果】

1. 分析対象者は100名 (介入群51名、比較群49名) だった。2群の背景において有意な群間差は認めなかった。
2. 介入群の母親は、入院中は平均6.0回/日、退院後は平均9.4回/日塗布しており、1日のおむつ交換回数に対する塗布割合は80%前後で実施していた。多くの母親が1日1回以上は塗布しており、塗布状況は良好であった。
3. 1か月健診時の肛門周囲部の紅斑発生状況は、紅斑ありは介入群40名 (78.4%)、比較群42名 (85.7%)、紅斑なしは介入群11名 (21.6%)、比較群7名 (14.3%) だった。比較群に比べて介入群の方が紅斑発生率は少ないが、紅斑の有無と保湿剤塗布の有無には関連を認めなかった ($p=.34$)。
4. 生後1か月間の角層機能は、2群ともTEWLとSCHは増加し皮膚表面pHは低下した。比較群に比べて介入群の方がTEWLの低下は有意に少なく、SCHは有意に増加し、皮膚表面pHは有意に低かった。
5. 2群の生後5日、1か月健診の表皮ブドウ球菌は70-80%台、大腸菌群は60-80%台の児に、黄色ブドウ球菌は20-40%台、大腸菌は30-50%台の児に検出され、細菌数は個人差が大きかった。1か月健診の方が2群ともに細菌の検出は増加傾向だが有意な差は認めなかった。
6. 本対象者のスキンケアの意識は元々高かったが、本研究よりさらに高まり、9割以上がケアに関心があると回答し、新生児の保湿および肛門周囲部に対するケアは8割以上の母親が必要と回答した。

【考察・結論】

1か月健診の紅斑発生率は介入群の方が少なかったが、2群と紅斑の有無には有意な関連を認めず、肛門周囲部の紅斑発生に対する保湿剤塗布の効果はあったとはいえなかった。一方、角層レベルでは、保湿剤の塗布はバリア機能の低下を防ぎ、角層水分量を増やし、皮膚表面pHは低下しており、肛門周囲部の角層機能をよりよく保つことが示された。今後の課題として、紅斑発生に最も影響する要因について探索すること、介入効果の指標を検討した上でランダム化比較試験による効果の再検証が挙げられた。(2015字)